

## 乳がん検診（巡回）

### 動 向

協会の乳がん集団検診は、昭和52年厚木市、53年からは神奈川県、55年より横浜市より受託し検診が行われてきた。いずれも視触診による検診である。昭和62年、乳がん検診が老人保健法に組み入れられ実施主体は全て市町村に移行した。

国は、平成12年に乳房エックス撮影（マンモグラフィ）併用検診を指針に盛り込み、協会でも平成14年に検診車を製造、17年には装置2台搭載の2号車を増車して、マンモグラフィ併用検診を推進してきた。

20年3月には、神奈川県より新たにマンモグラフィ検診車の貸与を受けて、更に検診態勢が整備された。

また、国の16年度指針では対象年齢を40歳以上隔年としているが、神奈川県内では、30歳以上や40以上も全年齢としている市町村もあり、対象者は市町村により異なっている。

協会も平成18年より乳がん撲滅のためのピンクリボン運動を展開しており、これに呼応するかのよう  
に受診者も増加の傾向にある。

検診の実務ならびに精度管理は、当協会が事務局を引き受けている「神奈川県乳がん集団検診協力医療機関連絡会（会長＝福田護・聖マリアンナ医科大学乳腺内分泌外科教授）」の指導により遂行されている。同連絡会は「県生活習慣病検診管理指導協議会乳がん分科会（会長＝同上、事務局＝県保健福祉部健康増進課）」の指導のもとに運営されている。

マンモグラフィ検診については、連絡会内に「マンモグラフィ運営委員会」を組織し、撮影ならびに読影の精度管理について協議する場を設けている。

### 結 果

検診受診者は18年度より少しずつ増加しはじめ、19年度では590人増加し、多くは初回受診者でありマンモグラフィ併用検診者である。しかし要精検者は減少し（要精検率は13.5%より9.9%）、しかもマンモグラフィ併用検診受診者の減少が著しいが（要精検率は15.8より11.9%）まだ一般よりは高い。

しかしこの検診ではマンモグラフィでは精検不要だが視触診のみの要精検のものも含まれているから要精検率が高くなるのは已むを得ない。精検受診率は県域では毎年80%前後で、横浜市に比較して10%近く低いのは、精検機関が少ないためと思われ、その整備が急がれる。発見乳がんは39例と前年の69例

より著しく減少、発見率も0.34%から0.19%と半減した。これは視触診が0.1%から0.12%と増加しているのに反し、マンモグラフィ併用検診が0.47%から0.22%と半減しているため、このことは陽性的中率にも1.8%（視触診1.5%マンモグラフィ併用1.9%で前年の2.5%、3.0%より低い。）と影響している。しかしマンモグラフィ併用検診は結果の未把握が多いことも無関係ではないかも知れないが精検精度管理の向上も望まれるところであるし、この検診の真価が問われる問題で今後の推移に注目したい。

年齢階級別では検診受診者数は前年とほぼ同傾向にあるが、前年がん確定率の高かった55～59歳代が大きく減少しているのに60～64歳代受診者数もがん確定率も減少していない。この年代はマンモグラフィ併用検診の効果が最も発揮し易く、健康にも関心が高いためかも知れない。最も乳がん発生率の高い40～54歳代受診率を高める努力が必要と思われる。癌は高齢者の病気との観念がまだ多くのこっていることであろう（かつて老健法の管理下にあった）が、最近メディアやピンクリボンキャンペーン等で関心が高まっているが、最も社会や家庭にあっても多忙な年代でもあり、もっとも受診し易い環境にも配慮しなければ受診率の向上には繋がらないのではないか。マンモグラフィ搭載検診車の増加によりもっと頻回な巡回や検診協力医療機関の開発、更に精密機関の充実等課題は多くあると思われる。

一般のメディアにより、マンモグラフィ併用検診（隔年）において、40歳代で30%の見落としがあったように報じられ、厚労省では超音波を加えた検診のトライアルをはじめたが、わが国では大部以前より超音波併用検診の優れた成績が多く発表されている。超音波は年代にあまり左右されず一定の検診効果があることは、多く学会で認められており、近年機器の発達も著しいので、検診とくに若年者（40歳代以下）の検診に早く導入されることを期待する。

厚労省が指針をだすためには、それなりの準備とエビデンスが不可欠かも知れないが、超音波のように既に日常の診療で威力を発揮している検査方法は地方自治体で、あるいは医師会レベルで独自に検診に採用しても良いのではないかと。将来を見据えた準備をしておきたい。

関係の集計表は97頁に掲載